

童謠
漫筆
ニコピソ草 (二)

仁 古 貧 生

二、幼兒の化學(A)

幼兒の科學、子供の科學、それは、大人の科學よりは少しく異なる直觀がはたります。幼兒の觀察、子供の直觀は、よし、それが、學理よりは反してゐても、その幼兒、

その子供の生活、過去の經驗により、直觀しえたころのものが、その結論となり、そのままに、信ぜられてをつて、よいのです、善い童話でも、荒唐無稽なものにして斥けられたのは、眞の童話が知られなかつた時代のこゝ。童謠も、幼兒の童謠であるだけ、此の種の不安は有たれながらも、幼兒の、自然性、單純性により、驚異の叫びとなり、豊かな想像となり、その端的な表現が、そのままに詩となり、童謠となるのです。

かくて、幼兒には、幼時から、その科學の芽生があるの

であります、と同時に、その反對に、幼兒には、幼時から、科學を與へるこゝが、その伸長の爲に、最も願はしい事でもあります。それあるが故に、私共は、少數の同志のものも、

繪雜誌の「幼年の科學」

を編輯して、十二冊を月刊して來ました。「幼年の科學」は、美しい繪雜誌です。最近、幼稚園のみならず、小學三四年までの幼兒の間に、非常に認められて、諸方の幼稚園や、小學校で、また、家庭で、悦ばれてをります。私も創刊以來、毎號二篇づゝの童謠を寄せてゐるのですが、願はくば

科學童謠

こゝいはるべき内容のものを、こゝ、苦心してをります。この「幼年の科學」が、繪によつて、科學の導きをしようとする

てゐるのと同じく、私は、童謡によつて、同じく、科學への導きもし、出来れば、科學的の説明もしよう心がけてをります。それが出来なくても、科學的の不思議を、歌はう心がけてをります。最近の十一月號に出しましたのは

炭焼親子

一、炭焼竈は 土の竈

お山の奥の 大土竈

お腹一ばい つめこんだ

薪は のこらす まつくろけ

明日は りつばな黒い炭

まごこか

ケンく

雫子の聲

二、昨日も 今日も 山ごもり

炭焼親子 頬かむり

父さの父さの また父さ

その又父さの昔から

代々 親子の炭焼さん

親子で

煙の

色を見る

で、第一節では、その「竈」が、かの「釜」でないこと。そして、お腹につめこむのは、薪だのに、それが、三日目には、立派な炭になつて、やがて、俵に入れられて、里へ、馬の脊なぎで運ばれて、まかくして、村へも、町へも賣り出されて、お座敷の火鉢に入れられる。そのまごを、かく説明したのです。殊に、第二節に於ては、その結末に於て、

親子で煙の色を見る

まごこを強調したくて、三行にも分けて書く事を求めておきました。これは、

親子で見てる 煙の色

まもしたいまごころ。即ち、「煙の色」を強調したいのです。が、又、別に、親子で、「見てる」事も強調したいのです。即ち、科學の力も何もないけれど、先祖代々、親から子へ、親から子へ、微妙な煙の色の見分け方は、秘傳のやうに教へられてゐるのです。これが、科學でない事はあり

ません。しかも、山の奥の、きたない土の竈です。そして、そこで働く技師長も、技手であり、助手である見習ひも――親も、子も、學問はないのに、立派な炭をつくつて、世の中に暖かさを提供する基を創造してゐるのです。しかも學者でなくて能くしてゐるのです。これを、讀へないでをれますか。しかも、親子は、作業服を着てをらず、帽子も冠らぬ頬かむり、綿入の袖無しが、何よりの外套であり、唯一の防寒具です。そして、耳にするものにては、峯の松風、遠く谷底に響く溪流の音、殊に、折々は親しみの深い雉子の聲。雉子は啼いても、獵人ではない炭焼親子は、その聲によつて、雉子の隠れ家を探し出して、獵銃を提げて忍び寄るのでは、斷じて、ありません。我が子の遊ぶ楽しい歌聲もきいて、その聲の聞えぬ日は淋しいさへ感じてゐるのです。

まことに、ラヂオを知らず、文化を知らぬ炭焼親子の満足した生活も、思ひ知られるゆゑでたさ。

そして、炭焼には、三日を要するさいふこも、第一節の

「明日は立派な黒い炭」

三、第二節の、

「昨日も今日も 山ごもり」

三によつて、分るつもりでゐます。

これで、科擧としての繪さは見えなくても、此の短い童謡によつて、「炭焼」の科擧が、幾分でも感ぜられた上に、その親子の、足らひたる境遇が、味ははれるなら、望外の幸でもあるのです。

三、幼兒の科擧(B)

觀察は、微細になされなくてはならないのは、必ずしも、幼兒の世界ばかりではありませんが、少くとも、幼兒にも、事物の觀察を、微細に遂行させる様に導かなくてはなりません。(實は、幼兒は、さう導かなくても、元來、微細な觀察をするものではあります。)

かくて、繪により、歌により、さうした方面の満足と與へ、少くとも、共鳴を得るならばきて、同じ「幼年の科擧」で、多田北鳥畫伯の畫を見てつけた童謡があります。

お手々 ポンポン

一、お手々 ポンポン 盲鬼めくらおに

うしろで ボン／＼ 又ボン／＼
まへでも ボン／＼ 又ボン／＼

後へ 前へ 手をのべて
手ばかり のべて 盲鬼めくらおに

おつかなさうな歩き振

ほらく／＼後よ ほら前よ

ボンボン ボンボン

ボン ボボボン

二、お手々 ボン／＼ 盲鬼めくらおに

うしろで ボン／＼ 又ボン／＼

まへでも ボン／＼ 又ボン／＼

今一息で つかまるこ

息をもせずに こわさうに

おつむおさへて しゃがんだ子

あれ／＼あの顔 あの眼付

ボンボン ボンボン

ボン ボボボン

第一節は、鬼が、こわさうに、危なつかしい足取で、手

ばかり伸べても、足の進まぬ滑稽振、第二節では、逃げる
子供の中に、今少しでつかまりさうな一人の、息づまる様
な顔付眼付を、見落さなかつたのです。

この觀察は、幼児の誰もが、よくするところ、又同時に、
鬼になつた子供も、逃げる子供も、此の二つの表現にある
こゝは、盲鬼では、必ず、するところ。

又、この一篇は、リズムから申しましたが、二節とも、
よく合つてゐますので、軽快な曲が得られさうです。

ほらく／＼ 後よ ほら前よ

あれ／＼ あの顔 あの眼付

の如き、最もよく合つてゐます。

四、幼児の科學(C)

科學とは、大きな言葉ですが、小學校の理科の中、博物
に屬するものに、童謡の世界のものが多し事を悦んでゐま
す。博物の中には、動物あり、植物あり、礦物あり、みな
自然界の美しさであり、不思議であり、恐しい力でありま

す。就中、動植物の、何でもが、子供との交渉が多くて、みな童謡になりますので、無蒸藏の題目を發見しうる次第です。

少しく時季を失しましたけれども、さんぼの習性といった様なものを、歌つてみたのが次のです。これも、「幼年の科學」第八號で、晝を與へられて、つけたのですが、第二節は、殊に、注意して、およみ下さい。

さん さん さんぼ

一、さんさん さんぼ 赤さんぼ

あかい かはい、赤さんぼ

一ぴき 二ひき 三四ひき

五ひき 六ひき 七八ひき

竹の垣根に 頭をならべて

飛行機みたいに お羽根をひろけて

ならんで しまつて 何してる

編隊飛行に お出かけか

世界一周して お出で

二、そらく逃げる 皆逃げる

ブーイ ブーイ、皆逃げる

一ぴき 二ひき 三四ひき

五ひき 六ひき 七八ひき

いたづらつ子の手を 上手ににけては

片つぱしから宙返りしては

にけても 遠くへ にけないで

舞ふのは 子供と遊ぶ氣か

ここまでお出で お茶のませ

最後の、「子供と遊ぶ氣」の想像は、けだし、科學的に、うそかも知れません。ですから、「か」です。疑問です。そして、又、第一節の、「編隊飛行」だの、「世界一周」だのミ、うそです。無茶です。しかし、飛行機みたいな蜻蛉の群が、ほんみに、竹の垣根の、竹の一本々々の先に、しまつて、羽根をひろけて、何か、待つてゐるのは、命令一下すぐ、次々に、飛び出すつもりでは、ないのでせうか。折柄、いたづらつ子が、一人、そうつミ、近よつて來るのです。拔足、差足、音もたてないで、その眼は、また、きもしないで、狙を定めて、攻めよるのです。

一體、少年達は、何故、かうまで、蜻蛉を捕へる事が好きなのでせう。蟬ざりと共に、わけて、都會の子供は、長い竿をもつて、追つかけまはず蜻蛉です。捕つて、唯捕つて、それから、それを何うしようといふのではないのです。それなのに、唯、捕りたい蜻蛉だに見えます。

この赤さんぽも、いたづらつ子に、攻められるを知るや、出来るだけ近くまで、近よらせておいて、さて、いざ、手が伸びて、身邊危しを見るや、ひらり、巧みに、その突撃を避けて、宙に浮いて、ひらり〜。如何にも、のんびりこしてゐるのです。全く、

にけても 遠くへ にけないで

まふのは 子供遊び氣か

です。このユーモアもいひたいほどの餘裕は、みんな、ぼろに有りさうもないのですが、愉快な生活ではありませんか。その子供にしても、七八びきの蜻蛉に、あやつられてゐるさも氣づかず、氣がついたにしても怒らず、八匹目に、巧みに逃げられるも、又もこの第一匹が、下りて来て、もこの所の先にこまるを見るや、今度こそこ、手に唾して、

攻めよつては、又、ブイに逃げられるも、第二匹が下りて来て、次々に、第三匹、第四匹も、下りて来ては、ブイ、ブイ、上手な宙返り。

ですから、子供遊びでゐるのでせう。

この、想像は、全く、當つてゐませんけれども、幼児のためには、此の程度の科學を、博物を、認めたいと思ふのです。

五、幼兒の化學(D)

水車くるくる

一、水車くるくる

朝から 晩まで

休まず 眠らず

夜の間も くるくる

くる〜〜〜

水車 まはれば

杵 杵 スットン

スットン ギートン

米搗 粟搗

スットン ギートン
スットン ギートン

二、何が くるくる

水車を まはすか

水さへ 流れりや

水車 くるく

くるくくくく

水車 まはれば

白 白 ガーラゴロ

ガーラリ ゴーロリ

豆ひき 麥ひき

ガーラリ ゴーロリ

ガーラリ ゴーロリ

(「幼年科學」第七號)

水が流れて 水車がまはる

水車がまはつて、杵も白も、動く。それで、米が搗かれ、
麥が搗かれ、豆がひかれ、皆粉にひかれるのです。

この、力の變化は、最もよく、自然力を應用したもので、

敢て、科學さいふに當りませんけれども、しかし、水車小屋を見て、屋外の大きな輪である羽車を見て、その廻轉のために屋内の軸が廻つてゐるのを、すぐ察する事は、幼兒に出来ても、その軸の廻轉につれて、杵さいふ杵が皆、働き、白さいふ白が、皆働くのだから、一寸、考へられませんか。まして、水の水平動が、杵の上下動となり、白の廻轉運動にも變るさいふ事は、想像もつかない所です。此の力の運動の認識が、幼兒に何物かを、植え付ける様に、此の作を敢てしてみました。

殊に、少し、内容が、六かしいので、幼兒に最も親しまれ易い擬聲を、せいぐ巧みにつかつて、これを生かさうき、つこめました。

水車くるくる

は今更ではありませんが、杵の擬聲に、

スットン ギートン

の二様があるのは、軋る音も出したくてでした。水車の軋るのは、鋭い聲になつて響きますが、スットン、ギートンに重ねますと、トンのおかけで、やはらかなります。

ガーラリ ゴーロリ

も、荒い穀物が、ガーラリで、細かいのが、ゴーロリです。

しかも、これは、

ガラリ ゴロリ

でなく、さうかざいつて

ガラゴロ ガラゴロ

ではないのです。あくまで、のんびりさ、

ガーラリ ゴーロリ

なのです。そこで、

スットン ギートン

ガーラリ ゴーロリ

さも、後で結んで、あくまで、のびやかに擬聲を活かしま

す。彼の、「デー河の粉屋」：“The Miller on the Dee”

の詩も思ひ合はされるのです。

こまれ、擬聲擬態の使驅の六かしさがあるだけ、その活

用に成功します。くさくさい説明にまして、一言半句

で、よく、要領を得るものです。そして、その、最も上手

であり、最も正確な使ひ手は、幼児です。少しの間隙もあ

らせず、最も適当な擬聲擬態の句を、適所に活用します。

幼児の伴侶たるものゝ、心して、耳を傾けてゐなくてはならないところだ。

六、幼児の科擧(E)

民族の間に、傳説の多いこまは、興味深く。そして、迷信のある事も、科擧のからくした世に、潤澤なる何物かを投入します。

幼児の間に、多くは、年長者から聞かされる幾多のハナシの中に、けしからぬものが幾つかありますが、その一つに、「日照り雨」についての「狐の嫁入」があります。

そもく、幼児と狐との交渉は、幼児と犬や、猫ほどの親しみは、有り得ないのに、よくも、狐が、出て來ます。

イソップの寓話を例にさるまでもなく、村の稻荷祠にも、玩具店のお面の中にも、狐は、幼児の世界に、確かな存在になつてゐます。

又更に、自らばけて、人間をばかす話の恐ろしさ。

その狐が、人の眞似をして、嫁入をするさういふから、いよく不思議です。その不思議は、日が照つてゐるに雨の降

るさいふ不思議な天候の日に、行はれるさいふから、まことに、まごころしくて、興をそゝるに十分です。

けれども、科學の世に、科學の重んずべき世に、そんな事を、幼児に、信じさせずまでもなく、考へさせてもいゝのでせうか。少くとも、繪にまでして、幼児に見せてもいゝのでせうか。「幼年の科學」は、立派な繪をもつて、その第六號に於て、「狐の嫁入」を提供しようとしたので、私は、題目も、やさしく、かへつて、更に、それは、をかしいぞ、と、幼児と共に疑ふ氣になつてしまひました。これは、老婆心でもありません。

狐のおよめさん

一、あら〜バラ〜雨の音

日和はよいに 照つてるに

さうして バラ〜日照り雨

ホントニ ホントカ

ホントニ ホントカ

二、こん〜小山の眞晝間

明るく見えたり かくれたり

提灯 ぶら〜小松原

ホントニ ホントカ

ホントニ ホントカ

三、こん〜小山の小狐が

大きくなつて お嫁入り

それで バラ〜日照り雨

ホントニ ホントカ

ホントニ ホントカ

四、バラ〜雨の止まぬ間に

はやく出て見よ およめさん

狐の嫁入行列を

ホントニ ホントカ

ホントニ ホントカ

そんな事があるものか――

一に曰く、日が照つてるに、雨の音

けだし、これは、本當であつた。

二に曰く、晝間の提灯の見えがくれ

これは、向の小松原が遠くて、何かの日の反射が、提灯
も見え、又、さうでなくも見える。

三に曰く、小山の小狐が大きくなるのは、よいこして、
そのお嫁入りが、晝間行はれるこいひ、しかも、それが、
里から見えるこいふのは、本當に本當かこ、大に疑ひ、
四に曰く、早く出て見よ、およめさんこ嫁入の行列こそ
—こいはれるや、

「そんなこがあるものか」

こもいひかねて、大に疑ひながらも、

「本當に 本當か」

本當に 本當か」

こ、出て来る素直さ。

かうしたところに、世の中の何かにつけて、自然界の諸
現象に對して、驚異と共に疑問を感じつゝ、やがては、想
像となり、推理となり、發見も、發明も、果されるので
す。少くも幼時に於て、その芽は、植え付けなくてはな
りません。

お母様のお話と子供 の教養

蘆谷蘆村著

著者は人も知る童話學の權威蘆谷重常氏。本書
は、童話の全系列を極く平易に簡単に、誰にも分る
様にものせられたもの。その上創作童話、日本童
話、泰西童話等の中から、數多い例話も引かれてあ
るので誠に便利なお本です。

職掌柄、童話等には精通してゐるべき筈の私共で
すけれども、幾度讀んでも、幾度讀んでも面白い、
教へられる事の多い、又日々の保育にも大變に役に
立つお本です。母としても、將又姉としても愛兒の
爲、弟妹の爲に是非精讀すべき書です。一讀を切に
お薦めいたします。

東京市神田區一ツ橋教育會館内

發行所 日本童話協會出版部

電九段四一五一
振替東京一四〇八

定價 一、五〇